

アテネ民主政と戦争 : ミュティレネ叛乱 とピュロス遠征

Nakamura, Jun / 中村, 純

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

81

(発行年 / Year)

2013-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008543>

アテネ民主政と戦争

— ミュティレネ叛乱とピュロス遠征 —

中 村 純

はじめに

ペリクレス死後のアテネ民主政は時に衆愚政とも呼ばれる。愚かな大衆とその機嫌をたくみに取りながら権力にしがみつくと煽動政治家たちの時代ということになるのか。これはまたペロポネソス戦争について第一級の史料を残した偉大な歴史家ツキディデスの評価でもある。紀元前5世紀も4分の3を過ぎた頃にはこうした評価は、当時の作家たち、と言っても言うまでもなくその著作が今に伝わっているような人たちに限ってのことではあるが、そうした作家たちの多くの間では、すでにステレオタイプ化していたかのようにも見える⁽¹⁾。

ツキディデスはペリクレスについてはしばしば引かれるとおり「こうして、その名は民主主義と呼ばれたにせよ、実質は秀逸無二の一市民による支配がおこなわれていた」と高い評価を与えておきながら、他方本稿で扱うクレオンをはじめとするペリクレスの後に続いた政治家たちについては「これに比べて、かれの後の者たちは、能力において互いに殆んど優劣の差がなかったので、皆己れこそ第一人者たらんとして民衆に媚び、政策の指導権を民衆の恣意にゆだねることとなった。このことが禍して、アテーナイのごとく大きいポリスを営み、支配圏を持つ国ではとうぜん、数多い政治的な過失が繰返されることとなり、その最たるものがシケリア遠征であった」と酷評している⁽²⁾。ただしペリクレス死後と一口で言っても、少なくともペロポネソス戦争の前半期にはまだアテネの国力にかけりは見えていない。ペロポネソス戦争の形勢もアテネ優勢と評価することが可能な時期であった。勝敗の帰趨がアテネ劣勢に大きく傾くのはツキディデスも述べている通り前415年に企てられたシチリア遠征失敗以降のことである。さしあたり前421年にスパルタとの間に締結されたニキアス

の平和と呼ばれる講和条約以前の時期に限って言うならば、アテネの民会はまだ取り立てて言うほどの「過失」を犯してはいない⁽³⁾。

さて、エフィアルテス改革以降のアテネにおいて民会を闊歩した煽動政治家たちはデマゴゴスと呼ばれる⁽⁴⁾。本稿は、典型的なデマゴゴスとして知られるクレオンの活躍した時期を議論の対象としようとしている。その時期に起こったふたつの軍事上の事件、レスボス島の有力ポリスであったミュティレネのデロス同盟離反と鎮圧、そしてアテネのピュロス遠征とのふたつを取り上げて、アテネ民会がこれらの事態にどのように対処したかを検討する。すでに上に述べたようにこの時期のアテネはペロポネソス戦争において比較的優勢を保っていた時期であると評価できるので、議論の赴くところは勢いアテネ民主政が国の存亡をかけた大戦争遂行中の重大な局面においてその都度そこそこ適切な判断を下すことができた理由を奈辺に求めるべきか、といった方向に向かっていくこととなろう。さしあたりここで言う適切な判断とは軍事的にそれなりに結果が出せる判断という程度の意味に過ぎない。それにしても俗に衆愚政と言われるもするこの時期のアテネ民主政が陸軍強国をもってギリシア世界に知られたスパルタ率いるところのペロポネソス同盟の攻勢を凌駕してむしろ優位に立つ勢いを見せているとすれば、アテネ民主政は、案外競争力の高い組織運営の仕組みを備えていたと評価せねばならないのかもしれない⁽⁵⁾。

問題の設定について今少し説明を加えておく。

クレイステネス改革から 2500 年を経た頃に企画された “Democracy 2500” Project の一環として開催された学会において P. B. マンヴィルは、古典期アテネ民主政と現代の企業との間の組織的特性を比較するといういささか風変わりな論を立てた。そこでは知識基盤社会といわれる時代において成功を収めた現代企業とアテネ民主政とが比較されている。マンヴィルはこの比較のためにアテネ民主政の特徴を 10 の項目にまとめて箇条書きにしているが、そのうちのひとつとして、「市民団は大衆として共通の討議と討論を通して少数の個人、あるいはどんなエリートよりもより健全でより賢い決定に到達することができる」という項目を挙げた。市民団全体の知が一人の、あるいは少数の優れた個人の知に勝るという考えはアテネ民主政の中心的信条であるとマンヴィルは見ている⁽⁶⁾。そしてこの信条こそが、厳しい競争的環境のなかで、現代のナレッジ・ワーカーの能力を最大限に引き出し、またそれを結集して常にイノベーションの創出に向かわねばならない現代企業がディベートとコミュニケーションの

重要性を強く認識している現状と合い通じるものであると見る。

変革の時代を生き抜こうとする現代企業の試みのいくつかがはるか昔のアテネ民主政の仕組みと酷似していることを、無論そのような比較の有効性の限界に留意しながら、マンヴィルは指摘した。その後マンヴィルは、“Democracy 2500” Project の企画者の一人であった J. オバーを共著者として “A Company of Citizens” を著して、一般向けに彼の考えを敷衍して解説している。さらにオバーは、“Democracy and Knowledge” でイノベーションと民主政との関係を追及した⁽⁷⁾。

そのオバーもマンヴィルと同様にシチリア遠征を扱った論文の中で、アテネ民主政を支えた、彼の言うところのイデオロギーなるものを構成する四つの信条のうちの一つとして、市民団の集团的決定は本質的に賢明であるという考えを挙げている⁽⁸⁾。賢明であるかどうかは判断の基準によるところもあろうこととてさておくとしても、本稿が取り上げようとしているふたつの事件は民主政下におけるアテネ民会の判断が結果として成功を収めた事例とまでは考えられるのではないか。ミュティレネの離反を鎮圧し、スファクテリア攻囲戦によってスパルタ正規兵を捕虜としたことは倫理的な善し悪しはおいても大きな軍事的成果であることは間違いないと言ってよいであろう。この成功はマンヴィルやオバーの主張を証し立てるものなのか、それともたまたまこの時はたとえ愚かな大衆の判断であってもそれが結果的には吉と出ただけのことなのか。

はたして集団の知は一人の優れた個人の知に勝るのか。冒頭で述べたとおり、古代の作家たちの答えが否定的であることはほぼ間違いない⁽⁹⁾。ひとまずクレイステネス改革からラミア戦争の敗北までざっと 200 年弱のアテネ民主政の歴史を一括りに見たとき、そもそも同時代におけるアテネ民主政に対する評価があまり芳しいものではなかったことはつとに知られた事実である。プラトンのいわゆる「哲人王」構想はこうした民主政批判のひとつの頂点に立つものと見做される。『ポリテイア』が現代に至るまで大きな影響力を有してきたことは否定するべくもない。またポッパーを筆頭とするプラトンに批判的論考も決して少なくはない。一人の、あるいは少数の優れた見識を持つ指導者によって入念に考え抜かれた統治に従うのがよいのか、可能な限り多数の構成員の参加の下でその時々を選び取られていく合意に任せるのがよいのか、にわかには判断のつきがたい問題であろう。本稿が扱うアルキダモス戦争期のふたつの事例に限って言うならば、後者の考え方をとってそれなりの成果が得られている

ように見える。何かことを為すにあたって民主政ポリスは市民の自由を尊重するがゆえにトップダウン型の組織のように強制によって市民の協力を促すことは難しい、とすれば戦争のようなとりわけ厳しい環境の中で生き残っていくことは困難であろう、といった趣旨の議論に対して、民主政擁護の立場を取るオーバーはそれでも実際に競争力を保って成果を挙げている具体的事例があることを指摘し、その現象を The puzzle of democratic advantage と呼んで、アルキダモス戦争期のアテネ民主政の事例を取り上げて検討している⁽¹⁰⁾。そこでまずはその論考を導きの糸としながら議論を進めていきたい。その上で集合知は一人の天才の知に勝るのか、改めて考えてみることにしよう。

さてとりあえず本論に入る前に節をあらためて、ツキディデスを史料として用いることについて前もって断っておくべきことをいくつか述べておくことにする。

1. ツキディデス『戦史』について

ペロポネソス戦争期の歴史を考えるにあたってツキディデスを第一級の史料として用いることに異論を唱える人はあるまい。とは言え、本来歴史書というものが単なる年代記ではないとするならば、ツキディデスには当然彼なりの歴史の見方があり、彼のペロポネソス戦争史はそうした見方に基づいて統一的な視点から叙述されたものであるという風に考えねばならないであろう。彼が語るあれやこれやの史実が客観的事実であるかどうかということならば、碑文史料などとき合わせてそれを検証することも出来よう。しかしなにかある事件なり人物なりについてのツキディデスの見方、了解の仕方をどのように受け止めるかとなるとなかなか簡単にはいかない。ペロポネソス戦争についての彼とは別の歴史家たちによる叙述が十分にまとまった形で残されているわけではないという事情も手伝って、これまでなされてきた諸研究においても、ツキディデス自身が自覚的に述べている歴史記述の方法論の検討から時代背景、ツキディデス個人の事情などの詮索まで含めて、議論はどうしても、ツキディデスのテキストそのものをどう読むかという点に係るところが大きくなってくのはやむをえない⁽¹¹⁾。

ツキディデスがアテネ民主政について必ずしも好意的ではなかったことはすでに述べたが、これから検討する箇所ですキディデスがどのような意図を背後

に秘めてそれぞれの叙述を行っていたかはその時々を考えるとして、今は後の議論との関係から必要と思われることのうち2点ほどを取り上げて前もって注意を喚起しておく。

ひとつは、戦史の叙述に挿入された「演説」についてである。「演説」はわれわれ現代人から見てやや違和感を催させる叙述の仕掛けと言わざるを得ないところであるが、ともあれそれがツキディデスの叙述の大きな特徴をなしていることは否定できない⁽¹²⁾。そして本論の検討はこの「演説」のいくつかを素材とせざるを得ないのである。ツキディデス自身は「演説」について以下のように語っている。

「他方、政見についての記録はやや事情がことなっている。戦闘状態にすでにある人やまさにその状態に陥ろうとする人が、各々の立場をふまえておこなった発言について、筆者自身がその場で聞いた演説でさえ、その一字一句を正確に思出すことは不可能であったし、また他処でなされた演説の内容を私につたえた人々にも正確な記憶を期待することはできなかった。したがって政見の記録は、事実表明された政見の全体としての主旨を、できうるかぎり忠実に、筆者の眼でたどりながら、各々の発言者がその場で直面した事態について、もっとも適切と判断して述べたにちがいない、と思われる論旨をもってその政見を綴った」⁽¹³⁾。

ツキディデスの書の演説部分にはそれほど大きな語り口のバラエティーはない⁽¹⁴⁾。そして上に述べられたとおり直接話法を用いて記述されてはいるものの「一字一句正確に」語られたとおりに記されているわけではないのである。なぜこのような表現の手法をとったのかは興味深いところではあるが⁽¹⁵⁾、ともあれ、形はだれその演説という風にはなっているものの実はそこにこそ「各々の発言者がその場で直面した事態について、もっとも適切と判断して述べたにちがいない」と思いをめぐらすツキディデスの解釈が色濃く映し出されているということを銘記しておかねばなるまい。

さて今ひとつ述べておくべきことは後の議論の主たる対象となる政治家クレオンと歴史家ツキディデスとの関係についてである。これは従来何かと取沙汰されているところであるが、本論のテーマからして前もって簡単に言及しておくのが適切であろう。アリストファネスのツキディデス評価ほど低くはないに

せよ、ツキディデスの記述はすでに見たとおり、クレオンに対して高い評価を与えているとは言いがたい。この点について筆者は以前に触れたことがあるので繰り返しは避けねばならないが、本稿と関わる部分だけについては手短かに再論することをご容赦いただきたい⁽¹⁶⁾。そもそもツキディデスはピュロス遠征直後のブラシダスのトラキア侵攻に際してこれを捕捉せんとする任務に失敗してアテネを去ることを余儀なくされた人物であることから、当時権勢並ぶものなかつたクレオンとの間に何らかの確執を想定する向きもあるが、本稿ではツキディデスのクレオンに関する記述が必ずしも好意的ではないとしてもその理由を個人的確執に求める立場は取らない⁽¹⁷⁾。コンナーの言う新しいタイプの政治家として登場したクレオンは、アンドルーズが“indispensable expert”と呼んだように、デロス同盟の盟主としてエーゲ海一帯に君臨することとなったアテネがそのような状況のなかで新たに必要とした能力を備えた指導者であったと見做してよいのではないか⁽¹⁸⁾。しかしそれゆえに彼がツキディデスも属していた旧来からのアテネの有力者たちの階層からは違和感を持って迎えられたとしても不思議はない。ツキディデスの記述にはクレオンとツキディデスとの、あるいは両者の属した社会層のそれぞれとの間の価値観の相違が反映しているという風に考えておきたい。

2. ミュティレネ

さて、すでに述べたとおり本稿で扱う時期のアテネはまだ勢い盛んな状況にあった。今仮に前431年に始まったペロポネソス戦争を、アルキダモス戦争、ニキアスの平和とデケレイア戦争というふうに分けてみるとすると、その最初の10年間に当たるアルキダモス戦争は、前424年にスパルタの名将ブラシダスが突如トラキアに現れてアテネ民会を驚愕せしめるにいたるまでは、アテネの側から見ればおおむね開戦時にペリクレスが立てた戦略が有効に機能していた時期と評価できるであろう。デロス同盟のなかでも有数の有力ポリスであったミュティレネをはじめとするレスボス島の諸ポリスが離反を企て鎮圧されたのは前428年から前427年にかけての出来事であった。ちなみにペリクレスが疫病に斃れたのは429年冬の出来事であり、次節で扱うアテネによるピュロス占拠という、スパルタを慌てふためかせた事件は前425年に举行された。

ミュティレネの離反にアテネ民会はどのように対処したのか。ミュティレネ

離反とその鎮圧の顛末は『戦史』の第3巻に記述されている⁽¹⁹⁾。まず簡単に概要を述べておこう。前428年夏、レスボス島の諸ポリスはデロス同盟からの離反を企てた。密告によっていち早くこれを知ったアテネは急遽軍船40艘をレスボスに送る。後手に回ったミュティレネ寡頭派はひとまず和平を提案しながらアテネ海軍の眼をかすめてスパルタに援軍要請の使者を送った。ペロポネソス同盟諸国はミュティレネの嘆願を受け入れ派兵を決定したものの収穫期であったため従軍には気乗り薄で遠征軍の集結はなかなか進まなかったとツキディデスは語る⁽²⁰⁾。一方アテネはさらに100艘の船隊を組織して示威行為に出た。この年の夏にアテネが稼働させた軍船は250艘というひと夏としては記録的数字に達している⁽²¹⁾。さらにアテネはパケスを指揮官として重装歩兵1,000名をレスボスに送る。この重装歩兵は自ら軍船のこぎ手となって海を渡りかの地でミュティレネを囲む城壁を構築した、とツキディデスは報告している。これらの作戦のためアテネは臨時財産税200タラントンを市民から徴収し、さらにデロス同盟の年賦金の滞納分徴収のために12艘の船隊を送ってその回収に努めた。

翌427年夏、ペロポネソス側はようやくアルキダスを指揮官とする42艘の船隊を送り出したが、援軍を待ちわびてアテネの包囲に耐えかねたミュティレネはアルキダスの船隊が姿を現す前に降伏してしまった。それを知ったアルキダスはミュティレネを取り返すべくレスボスに急行することもせず、イオニアを荒らそうとするというわけでもなく、一途本国への帰還をめざす。パケスはこれを追ったがパトモス付近で追跡をやめてレスボスへ戻り、ミュティレネの処分についてはアテネ本国の指示を待った。アテネでは1日にして前日の決定を覆したことで知られるいわゆる「ミュティレネ論争」の末、反乱の首謀者のみを処刑することとした⁽²²⁾。結局アテネは鎮圧に成功して勝利を収めたわけであるがその成功の理由はどこにあったのだろうか。

まずはオバーの見解を参照したい⁽²³⁾。そもそもオバーは、アルキダモス戦争期に、市民の自由を前提とする民主政をとっていたアテネがどうやって市民の力の自発的な結集を引き出し、スパルタとそのペロポネソス同盟に対峙して軍事的優位を保っていたのかを問題とし、ツキディデスの記述を読み込むことによってその答えを導き出そうとした。そしてそもそもこの時期のアテネの軍事的成功がうまく調整された市民たちの協同作業と社会的、技術的知の効果的な利用によるものであることを読者に理解させることを意図して、『戦史』

の記述は書かれているという見解に達した。オーバーはツキディデスの叙述は理論的要請と具体的な事件の叙述との組み合わせで進行していくと見ているようだが、今検討しているミュティレネ離反と次節で問題にするピュロス遠征について言えば、ツキディデスの見解の理屈の上での見通しは下に引くペロポネソス戦争開戦時のコリント代表の演説に語られたアテネ人の性質（エートス）といわゆる葬送演説におけるペリクレスの弁舌に託されたアテネ民主政のいくぶん理想化されたあり方に示されていると見られている。

ツキディデスによれば、コリント代表は以下のように語った。

「諸君は敵とすべきアテーナイ人の性質についても、またかれらを相手の戦争が諸君の想像を全く絶する異質のものとなることも、一度として理詰めにかけてみるべきではない。まずかれらは改新主義者だ。鋭敏に策を立て、政策はかならず実行によって実らせる。ところが諸君は現状維持を奉じている。先のことは考えず、必要にせまられても実行にまでこぎつけようとはしない。また、かれらは実力をこえても、断行し、良識に逆らっても冒険をおかし、死地に陥っても昂然としている。だが諸君はけっして、全知全能を発揮した例がなく、信頼すべきを疑い、恐るべくもないものに何時までも脅えている。さらに加えたい、要するに恐れ知らずと臆病者、国をあとにするものと国から一步も外へ出ぬものの違いだ。じじつかれらは外に出れば何かが手に入ると考え、諸君は出れば手の中のものを失う、と恐れるからだ。そして故に勝つときはどこまでも追撃をゆるめず、敗れるときは一步退くことをも惜しむのがアテーナイ人だ。しかもポリスのためならば、命をも羽毛のごとくに軽んじるが、ポリスのために一事をなさんとするとき己が最高の知性を発揮する。さらに企てて行わざるは己れの損失と心得ている、しかし攻めて掌中に収めたものは、さらにすすんで得られるはずのものに比すれば、僅少であるとしか思わない。よしんば企てて挫折することがあっても、案を練りなおして損失を補う。決議をただちに実行するために、ただアテーナイ人のみが、意図すれば直ちに希望と現実を一致させることができる。しかもその一つを成すにもかかれらは危険にみちた全生涯を営々と苦勞に堪えつづけ、つねに得ることに懸命であるために、すでに手中にあるものを楽しむ暇はほとんどない。祭行事でさえかれらにとってはたんなる必要な義務遂行でしかない、また手を休めて

静寂を楽しむことは骨を砕く多忙よりも恐ろしい災害としか考えられないからだ。このために結局、かれらは自分にも他人にも、安んじる暇を許すことができない性癖をもつ、と言っても間違いではない」⁽²⁴⁾。

ツキディデスの記述においては、すでにペロポネソス戦争開戦時にコリント代表がアテネ人はあくなき革新主義者であり、野心に満ち、ことにあたっては迅速で実行力もあり、遠くの利を見据えて行動することを指摘している。それに比してスパルタ人は保守的で、動きが鈍く、リスクをとることを嫌って内に籠もる、と評価されているとオバーは理解している⁽²⁵⁾。たしかにツキディデスの記述を見れば、ミュティレネ反乱の経過は一瞥しただけでも、アテネの迅速さ、野心、市民団全体のみごとな協調行動とそれに対するスパルタの鈍重さ、ペロポネソス同盟側の足並みの乱れが対比的に見て取れる。まるで開戦時のコリント代表の評価がそのまま具体的事例として顕現してきたかのようにさえ見えてくる記述である。

ツキディデスは上に述べたようなアテネ人の特徴を「アテネ人の性質」としているが、オバーはこれを民主政によって培われてきたものと考えることを主張する⁽²⁶⁾。ペリクレスの口々に託して、アテネ民主政を美しく理想的に語ったものとしてよく引かれる葬送演説の中の、以下に引く部分はその抛り所とされる。

「また、戦の訓練に眼をうつせば、われらは次の点において敵側よりもすぐれている。まず、われらは何人にたいしてもポリスを開放し、決して遠つ国の人々を追うたことはなく、学問であれ見物であれ、知識を人に拒んだためしはない。敵に見られては損をする、という考をわれらは持っていないのだ。なぜかと言えば、われらが力と頼むのは、戦の仕掛や虚構ではなく、事を成さんとするわれら自身の敢然たる意欲をおいてほかにないからである。子弟の教育においても、彼我の距りは大きい。かれらは幼くして厳格な訓練をはじめ、勇気の涵養につとめるが、われらは自由の気風に育ちながら、彼我対等の陣をかまえて危険にたじろぐことはない。——中略——われらは質朴なる美を愛し、柔弱に墮することなき知を愛する。われらは富を行動の礎とするが、いたずらに富を誇らない。また身の貧しさを認めることを恥とはしないが、貧困を克服する努力を怠るのを深

く恥じる。そして己れの家計同様に国の計にもよく心を用い、己れの生業に熟達をばげむかたわら、国政の進むべき道に充分な判断をもつように心得る。ただわれらのみは、公私両域の活動に関与せぬものを閑を楽しむ人とは言わず、ただ無益な人間と見做す。そしてわれら市民自身、決議を求められれば判断を下しうることはもちろん、提議された問題を正しく理解することができる。理をわけた議論を行動の妨げとは考えず、行動にうつる前にことをわけて理解していないときこそかえって失敗を招く、と考えているからだ。この点についてもわれらの態度は他者の慣習から隔絶している。われらは打たんとする手を理詰めに考えぬいて行動に移るとき、もっとも果敢に行動できる」⁽²⁷⁾。

以上に見るとおり、アテネは自由で開かれたポリスであり、民主政下における政策決定は全市民の参加を前提とする民会の場で個々の、自分の判断に責任を持つ市民たちによってなされる。居住地、社会層などを異にする市民たちそれぞれがさまざまな場において断片的知識をおのおの保有している時、その効果的な利用のためには「散在している知」のそれぞれが秘匿されることなく公開されることがまず必要となる⁽²⁸⁾。アテネ市民は上に述べられたとおり、敵に対してすら知の公開を拒まない人々であった。そして十分に議を尽くした上で政策を実行に移す。ただし、「ただわれらのみは、公私両域の活動に関与せぬものを閑を楽しむ人とは言わず、ただ無益な人間と見做す」といっているので、自分は参加せずに成果だけを受け取ろうとする「ただ乗り」に対しては何らかの社会的制裁が予想される。このように自由で開かれた社会においてこそ社会のさまざまなところに散在する知の効果的な利用が可能になるというオパーの主張には取り立てて異議を唱えるべきところもない。参加型の決定方式であればこそ、一旦決まればその決定の実施にあたって自発的、意欲的な集合的協同行動がなされるという点についても異論はない。ついでに付け加えておくと、パケスを指揮官としてレスボスに送られた1,000名の重装歩兵は、普通なら軍船のこぎ手となるような階層の市民ではなかったであろうが、「自ら軍船の漕手となって海をわたり、レスボスに到着すると、ミュティレーネーの周囲に一重の城壁を築きめぐらした」。このような柔軟な対応が可能なのも民主政であればこそであるとオパーが言うのもそのとおりであろう。

しかし、アテネが自由で開かれたポリスであれば確かに社会に散在する知を

活用する環境は整っているとしても市民たちにそれを活用しようという意欲がなければ仕方あるまい。参加型の決定方式が意欲的な振舞い方を涵養すると言ってみても、そもそも参加型の決定方式自体が強い参加の意欲なしには機能しない。前5世紀のアテネ人の精力的な活動を直接民主政という政体と直に因果関係で結ぼうとすれば、参加の意欲があってはじめて直接民主政が成り立つのか、直接民主政こそが参加の意欲を育むのか、循環論に陥るのではないか。とりわけ、当時としては未曾有の事態であったと思われる下層市民の政治参加という事態を考える時、彼らを恒常的に政治参加へと誘った要因としては、今日しばしば「帝国」と呼ばれるデロス同盟を通じてのエーゲ海一帯の支配を挙げるのが妥当ではないか。「帝国」支配とそのもたらす果実こそが、自由な市民たちの結束を促し、たとえそれぞれ個々の利を求めてではあれ、精力的な活動に駆り立てる力の源泉であったと考えたほうが無理がないように思う。ただし、振り返ってみればたしかに前5世紀アテネにおいて内における民主政の進展と外に対するデロス同盟を通じたエーゲ海一帯の諸ポリスの支配とは表裏一体となって進行したことは否定できない事実であろう。そしてミュティレネの離反と鎮圧という出来事はペリクレス死後も継続されていく「帝国」支配政策の現実そのものであると認識せねばならない。以上のことを踏まえて考えれば、アテネ民主政の政策決定のあり様が理屈の上ではともかく事実としてはミュティレネ反乱への対応と密接なかかわりをもっていたであろうことは否定すべくもない。参加型民主政の制度がアテネ人を精力的な活動に駆り立てたのか、制度を担うアテネ人の性質がもともとツキディデスの描写するような積極的なものであったのかは今は問わない。ただアテネ民主政と「帝国」政策との密着ぶりだけを再確認しておきたい。その上で次節では、アテネによるピュロス遠征を取り上げてアテネ民主政における政策決定とその実行の具体的な様子についてさらに検討を加えよう。

ところで、この節を閉じる前にいまひとつ考えておきたいことがある。ミュティレネ反乱の後処理を決定したアテネ民会をめぐる問題についてである。この民会は、初めはミュティレネ市民全員の処刑を決定したが翌日再び民会が開かれ、責任者のみの処刑にとどめられた。一旦は決定したことを一夜のうちに覆す気まぐれとも移る不安定さ、その時々感情に流されやすい大衆とそれを煽り立てるデマゴゴスの跋扈といったアテネ民主政の負の側面を示す典型的な例としてこの民会が取り上げられることも稀ではない。この民会でミュティレ

ネ市民全員処刑を提案して一旦は民会にそれを決定させたのはクレオンであった。

さしあたりまず、この民会についての記述が、ペリクレス死後のアテネの政治状況とその中での民会の様子を語る最初の記述であり、そこではペリクレスをも失うことになった凄惨な疫病が猛威を振るった直後であるにもかかわらずアテネの「帝国」政策そのものは微動だにしていないということを確認しておきたい。クレオンの案に反対したのはディオドトスなる一市民であったが、その反論の要点は彼の主張した責任者のみ処刑という比較的寛大な案のほうがその後のアテネの支配にとって有効であるという点であった⁽²⁹⁾。その上でしかし、一旦決定したことを翌日再度民会を開いて覆すという事態は異例中の異例とあって決して誇張ではない。ペリクレスという強力なリーダーシップを持った政治家を失ったアテネの困難な状況が如実に現れている。『戦史』Ⅱ. 65. の記述を思い起こせば、その時々政治家たちの能力に左右されるということがアテネ民主政の構造的欠陥なのではないかという考えに誘われても不思議はない。

ペリクレス以後のアテネ民会について、オバーはそれがスピーチ・コンテストのようなものと化していると想定している。そこでは真実より喝采が求められている。弁論家の主張がポリスの利益のためか自己の私益のためかを常に疑われる状況ともあいまって弁論家が率直に、ある意味では無防備に、理屈の通る政策を提言することが難しくなっている。そのような状況で民会は決定不能状態に陥りやすい。また政治家はクレオンのようにその時々の大衆の感情に訴えるという戦略に頼ることになりがちである。ミュティレネ処分をめぐる民会の記述は上記のようなアテネ民会の困難の典型的な例であるとオバーは考える⁽³⁰⁾。

ツキディデスが、アテネの民会を一種の弁論のアリーナのようなものとして描写しているという理解にはさほど異論はあるまい。ツキディデスは、「かれの後の者たちは、能力において互いに殆んど優劣の差がなかったので、皆己れこそ第一人者たらんとして民衆に媚び、政策の指導権を民衆の恣意にゆだねることとなった」と述べている⁽³¹⁾。しかしここでは民会において「真実より喝采が重要となる」という状況についていまい少し別の角度から考えてみたい。

クレオンはミュティレネ処分を議する民会で聴衆に「要するに、諸君はポリスの存亡を議する人間というよりも、弁論術師を取り巻いている観衆のごとき

態度で、美辞麗句にたわいもなく心を奪われているのだ」と語っている⁽³²⁾。すでに論じたことであるが、大衆の心を動かすクレオンの弁論の力はペリクレスと同様の階層に属した人々がソフィストから学びつつあったいわゆる弁論術の力とは質の違うものであったと考えられる。「国を益する点では、遅鈍でも分別をわきまえているほうが、器用であっても法を恐れぬものよりも大なる貢献をなし、概して単純な頭の者たちの方が小伶俐な衆よりもよき市民たりうる」という言葉を W. R. コンナーは反知性主義の記念碑的言明と評している⁽³³⁾。オーバーも指摘するとおり、クレオンは結局は大衆の感情に訴える戦略をとっている。真実よりも喝采の民会というアリーナで勝者となるには常に論理的に相手を打ち負かさねばならないわけではないということはずでに十分認識されていた。アテネの民会では、必ずしもすべてが明確に言語化された提案をもってそこに集う市民たちを理詰めで説得しなければ政策提案が採択されないというわけではないということであろう。今もし仮に、個々別々に、そしてそれぞれ部分的にアテネ社会の各所に散在しているさまざまな知を有効に活用する仕組みを考えようとするならば、それぞれのところでは完結していない部分的な知が散在していて、その知が可能な部分に関してのみであれオープンにされているという前提をおいてよければ、すべてを論理的に統合ないし整理しようとするのではなく、部分的な知を堅持したまま、いくつかの案の中から民会に集う多様な市民たちのそれぞれが自分の立ち位置から見て好ましいと思われる案を、いわば人気投票のようなかたちで選択するという仕組みは案外有望な案であるように思われる⁽³⁴⁾。

3. ピュロス

前 425 年夏、スパルタとの戦いも予想外に長引き、疫病という思わぬ災厄にも見舞われて厭戦気分も立ち昇ってくるなかで、アテネはペロポネソス半島西南部に位置するピュロスを占領し、そこに砦を築くという挙に出た⁽³⁵⁾。このこと自体大きな軍事的成功であったが、さらにその上、ピュロス奪回のために急遽派遣されたものの、その後の海戦の結果、ピュロスの港湾部にちょうど蓋をするような姿で横たわるスファクテリア島に取り残される形になってしまったスパルタ軍のうち、正規兵 120 名を捕虜とする大戦果を挙げた。これ以後スパルタはペロポネソス戦争開戦以来連年続けていたアッティカ侵攻を控え、数

年を経て、ニキアスの平和をもってようやく捕虜の返還を果たすことになる⁽³⁶⁾。

元来、ペロポネソス半島の沿岸地域からスパルタの背後を突こうという目論見はペロポネソス戦争開戦当初からのペリクレスの戦略に沿った作戦と言える。しかしこの線に沿ったアテネの攻撃はそれまではさしたる成果を挙げていたわけではなかった⁽³⁷⁾。強いリーダーシップを持っていたペリクレスを失った後にもかかわらず、アテネ民主政はいかにしてこのような快挙を為し得たのか。

幸運に恵まれたからという答がまず第一に思い浮かぶかもしれない。ツキディデスの記述を一瞥すれば誰もそういう印象を抱くのではないか。この快挙は偶然によるものであると。そもそもピュロスを占拠した軍は、初めからそのために送られたわけではなく、シチリア方面に向けて出航した40艘のアテネ船隊が当面目指していたのはケルキュラであった。二人の指揮官やアテネ軍兵士たちにピュロスに寄港し、そこに拠点を築くよう熱心に説いたのはデモステネスであったが、彼は指揮官の立場にあつたわけではない。ツキディデスはこのときのデモステネスについて「個人としての希望が容れられて、彼が希望する機会が生ずれば、シチリア派遣の40艘の船隊をペロポネソス沿岸で用いてもよい、という公の許可が与えられた」と語っている⁽³⁸⁾。ピュロス占拠はアテネ民会において審議され、それを是とする決議を得て、初めからそれを実行すべく派遣された部隊によって挙行されたわけではないらしい。

いましてツキディデスの語るところに耳を傾けよう。ペロポネソスの船隊がすでにケルキュラに到着していることを知った二人の指揮官はケルキュラに急航しようとしたが、

「デーモステネースは一先ずピュロスに船隊をつけ、必要な対策を整えてから航海を続けることを提案した。両指揮官はデーモステネースの案に反対したが、たまたま荒天となり船隊は止むなくピュロスに避難した。そこでデーモステネースはただちに此処に城壁を築き砦を構えるべし、と主張し（じつはこれが目的でかれは船隊に加わっていたのだ）、ピュロスでは木材、石材が容易に調達できるし、天然要害の地であり、しかもこの地にも、また広大な周辺にも防備兵がないことなどを指摘した。というのは、ピュロスはスパルタから四百スタディオス（約七十キロ）の距離にあり、かつてのメッセーニア領に属し、ラケダイモン人はこの地をコリュ

バシオン（“とっぱな”）と呼んでいた。しかし両指揮官は、デーモステネースが余計な作戦のために戦費を空費したいのなら、ピュロスに限らずペロポネーソス沿岸には他に幾つでも無人の岬があるではないか、といて取りあわなかった。だがデーモステネースに言わすれば、他のいかなる地にもまさるピュロスの作戦上の利点は、港湾に接していること、この地は古くはメッセーニア人の国であり、これを基地としてメッセーニア人を活躍させれば、かれらはラケダイモン人と同一系の方言を話すから、敵勢に甚大な被害を与えうること、そしてメッセーニア人を用いるならば、ピュロスの警備は確固不拔たりうること、などであった。

しかしかれは指揮官たちを承知させることができず、後からさらに兵隊長にその案を打ちあけてみたが、兵士らの心を動かすにも至らなかったもので、しばらく様子を見ていた。すると、悪天候のために退屈していた兵士らがつつぜん、行動慾に駆られてピュロスを中心に城壁を築きはじめたのである。かれらは手を休める暇を惜しんで作業を続けた。石を切る鉄鋸を持ってきていなかったため、適当な石を選んで運び、うまく合う場所にはめ込んで壁を組立てた。また隙間止めの粘土が必要になると、運搬用の籠が無かったので、兵士らは体で運んだ。つまりできるだけうまく粘土が背に乗るように腰をかかめ、土が滑り落ちないように両手を背に組み、泥を運んだのである。こうしてかれらは、ラケダイモン勢が急を知って応戦に来るより早く、最も攻撃を受けやすい地点の防壁を完成しようと、あらゆる手段を動員して工事を急いだ。というのは、この地点の大部分は天然の要塞の趣きをなして、防壁の必要がなかったからである」⁽³⁹⁾。

ツキディデスの記述を一見すると、アテネ船隊は「たまたま荒天となり」、
「止むなくピュロスに避難した」と記述されており、そしてその場所で「悪天候のために退屈していた兵士らがつつぜん、行動慾に駆られてピュロスを中心に城壁を築きはじめたのである」とたしかに書かれている。アテネ軍は6日間で砦を築き、デーモステネースに5艘の船を残してケルキュラへ向かった⁽⁴⁰⁾。

一方急を知ったスパルタはアッティカに侵攻していた陸軍を引き返し、ケルキュラにいた船隊60艘も呼び戻して、ピュロス奪還を試みた。この時スパルタ軍中には、かつてペリクレス存命中のアテネ軍のメトネ要塞攻撃を撃退し、またこの後トラキア遠征によってアテネ人の心胆を寒からしめることとなるス

パルタの勇将ブラシダスも加わっていた。デモステネスはよくスパルタの猛攻を凌ぎ、彼の援助要請を受けて到着したアテネ船隊はスパルタ海軍を破って、湾の入り口をふさぐ形で存在するスファクテリア島に420名ほどのスパルタ軍守備兵を封じ込めた。このスパルタ兵の救出が不可能であると判断したスパルタは現地のアテネ軍と一時的和約を結び、アテネ本国へ和平を求める使者を派遣した⁽⁴¹⁾。

さてここでクレオンが登場する。

スパルタはアテネが和平提案を受けるものと期待していた。「だがアテーナイ側は、兵士らを島に閉じ込めておくかぎり、自分たちが望みのときに何時でも、和議を結びうるものと見て、一そう有利な条件を手に入れようとした。とりわけ強硬にその旨を市民らに説いたのは、クレアイネトスの子クレオンで、かれは当時民衆指導者として一般庶民のあいだで絶大な信望を担っていた。このときもかれは会衆を説いて次のように返答させたのである」とツキディデスは語る。このときの返答内容は到底スパルタの受け入れられるものではなく、和平交渉は不調に終わった⁽⁴²⁾。

スパルタ側はスファクテリア島の兵士たちに必死の食糧補給を続ける。夏が終わればアテネ海軍も封鎖を続行することはできない。ここでツキディデスは、アテネ民会の審議の様子をひとつの突発的な出来事として語る。

「しかしアテーナイ人の不安を強めた最大の原因は、ラケダイモン側が二度と再び和議申し入れの使節をアテーナイに送ろうとしないのは戦況好転の見通しを得たため、と思われたからであった。そして先の和議申し入れを拒否したことが、今さらのように悔まれた。和議に反対を唱えたクレオンは、そのために自分にアテーナイ人が疑いをむけているのを知って、ピュロスからの使者の言には偽りがある、と放言した。しかし使者たちは、自分たちの言葉を信じないのであれば、べつの偵察官を送ればよい、と提案したので、結局クレオン自身とテアゲネースが公の偵察官として選出された。ここに至ってクレオンは、自分が偽りだと非難した情報を真実と認めるか、さもなくば自分が偽って偽りを暴露されるか、ひっきょうそのいずれかに陥らざるを得ないと悟り、また、アテーナイ市民がさらに積極的な対策を渴望しているのを見てとって、軍勢派遣の提案をおこなった、今さら偵察官など送って時を空費し逡巡すべきではない、もし市民ら

が情報の真实性を認めるのであれば、島内勢撃破のために挙げて軍船をすすめるべきだ、と。そして、当時指揮官職にあったニーケーラトスの子ニーキアースが、かねてより自分の政敵であったところから、ニーキアースを指差して、指揮官どもが男なら、アテーナイの軍備をもってすれば、船隊を率いて島の敵兵どもを取り押えるくらいはたやすかろう、いや自分さえ若し指揮官であったなら、とうの昔にできたはず、と責めたてた。

すると市民らがクレオンにむかって、本当にたやすいと思うなら、何故今直ぐにも船を出さないのだ、と騒ぎはじめるのを聞いたニーキアースは、自分に射られた弾効に応じて言った、クレオンが望みの兵力を率いて敵勢を攻撃することに、自分たち指揮官は異議を唱えない、と。クレオンははじめニーキアースが口先だけで指揮権譲渡を問題にしていると高をくくっていたので、よし引き受けると言いつのつたが、ニーキアースが本当に譲ろうとするのを見てすっかりおじ気づいた。彼は、よもやニーキアースが己れの体面を傷つけてまで職を譲りはすまいと考えて、前言をひるがえして、いや軍勢の指揮は自分がやると言ったのではない、ニーキアースがやるべきである、と逃げようとした。だがニーキアースは再びクレオンを推し、自分からすすんでピュロス方面の指揮職を辞し、アテーナイ市民をその証人に立てようとした。市民らは群衆心理の促すままに、クレオンが航海の任から逃げるため、前言を撤回しようと言を左右にすればする程、ますます凶にのってニーキアースよ職を辞すべし、クレオンよ船出すべし、と叫びたてた。そして遂にクレオンは己れの言葉から逃れる術を失って、船隊指揮の責任を負わされると、今度は立ち上ってこう言った、ラケダイモン人など何の恐れるに足りよう、アテーナイ本国の兵士は一兵もいらぬ、アテーナイ駐留のレームノス、イムプロス両島の兵士、かねてアイノスから加勢の軽盾兵、その他の地域からの弓兵四百、それだけを率いて出発する。そしてピュロスの味方と協力して二十日の中に敵兵を生捕りにして連れてくる、さもなくば現地で皆殺しにしてみせる、と。アテーナイ人はかれの浅慮な放言に失笑を洩すものさえたが、しかし心ある者たちは望むらくはこれでクレオンの政治的生命を絶つことができよう、また実に外れたところでラケダイモン人を屈服させることになる、いずれにせよ二つの善のうち一方は手に入る、と考えてひそかに喜んだ」⁽⁴³⁾。

クレオンは「一そう有利な条件を手に入れようとした」アテネ民会を扇動し、アテネは和平の機会を逸することとなった。その後戦況が膠着状態となり、民会の追求の矛先が自分に向けられそうになると「ピュロスからの使者の言には偽りがある、と放言し」、さらに窮地に陥ると、軍勢派遣を提案してその時指揮官であったニキアスを責めた。しかしニキアスから指揮権譲渡を申し出られて引っ込みがつかなくなりついには「ラケダイモン人など何の恐れるに足りよう、アテーナイ本国の兵士は一兵もいらぬ、アテーナイ駐留のレームノス、イムプロス両島の兵士、かねてアイノスから加勢の軽盾兵、その他の地域からの弓兵四百、それだけを率いて出発する。そしてピュロスの味方と協力して二十日の中に敵兵を生捕りにして連れてくる、さもなくば現地で皆殺しにしてみせる」と宣言するにいたった。ツキディデスは「浅慮な放言に失笑を洩すものさえいた」と評している。ところが現地では、ふとした出来事のおかげでデモステネスが上陸作戦の成功に自信を持ち、準備を整えて待っていた。スファクテリア島は森林に覆われ、見通しが利かないことをデモステネスは懸念していたのだが、アテネ兵士の炊事の際の失火によってこの森林がほとんど丸焼けになってしまったのである⁽⁴⁴⁾。やがてクレオンの率いる軍の到着を待って上陸作戦が挙行され、激戦の末クレオンの高言はみごとに実現し、アテネはスパルタとの和平交渉を有利に進める貴重なカードを手に入れることとなったのであった。

ツキディデスの記述を一瞥すると、アテネは嵐と兵士の気まぐれのおかげでピュロスを占拠したかのような印象を持って不思議はない。クレオンは、スパルタの和平提案に対しては強硬策をもって民会を扇動し、結果的にアテネは和平の機会を逸した。その後事態が膠着し民会の追及が自分に及びそうになると、クレオンはそれをかわそうとして苦し紛れに軍勢派遣を提案し、かえって思いもかけずその指揮を背負わされることになる。将軍経験のないクレオンを指揮官として戦場に送るというアテネ民会の決議もいかにも無謀に映るが、現地では折よく起こった失火事件にも助けられて、名将デモステネスがすでに準備を整えて待っており、大勝利を得るといふ結果に収まった。といった具合に事件のいきさつを読むようにツキディデスは誘っているのだろうか。本節冒頭に、幸運に恵まれたから、という解釈の可能性を挙げた所以は上記の点にあった。

確かにピュロス事件の顛末を語るツキディデスの文章には「思わぬ出来ごと」とか「偶然にも」といった表現が多いことを久保正彰は指摘している。この事

実の持つ深い含蓄について語る久保の論考を取り上げて詳しく紹介する余裕は今はない⁽⁴⁵⁾。さしあたり今必要と思われるところだけをかいつまんで紹介する。ピュロス占拠は、「一見、嵐という予想外の力の助けがもたらした思いつきであったかのような印象を多くの読者に与えることになっている」が⁽⁴⁶⁾、その原因のひとつはツキディデスの記述の順序にある。ツキディデスは、「デモステネスという一人の人物の卓越した知力と行動力を主因と見做すことによっではじめてよく理解できるピュロス作戦の発端を記述するに際して、当然これに附随する補助的原因の一つとして偶然に由来する事柄をも記入した」のであって、「すべてことのなりゆきは、明確な意図と計画のもとに好機を待つもののみ味方となる」と言わんとしている。というのが久保の説くところである⁽⁴⁷⁾。そこにはピュロス攻撃が開戦以来のペリクレスの戦略構想に沿ったものであったこと、デモステネスが強い信念を持って計画実現の機会を飽くことなく窺い続けたこと、アイトリアでの敗戦の経験やナウパクトスのメッセニア人との繋がりといった、一度はツキディデスと同僚の指揮官であったことも含めたデモステネスのバックグラウンドなどが丹念に説明されている⁽⁴⁸⁾。久保の論はアテネのピュロス占拠が単なる棚牡舟式の幸運によるだけのものでは決してなかったことを教える。それでもアテネ民会がデモステネスの計画を全面的に支持することができなかったこともまた事実であり、自然現象などによる不思議ななりゆきがデモステネスの計画の実現の後押しをしたようすも克明に教えてくれる。

クレオンについても、ツキディデスの記述の仕方のゆえに、「クレオンという政治家には深い配慮や計画的思考が全く欠如していたかのごとき印象が強められていることは確かであろう」としながらも、それはむしろ「ピュロス戦記」におけるクレオンの真の役割に焦点を絞り、「その一面のみを際立たせようとした、と見做されるべきであろう」と言う⁽⁴⁹⁾。そしてツキディデスは、「明晰な計画と強靱な意志の人デモステネスと展望を欠きなりゆきに便乗するクレオンと」の差異を強く印象付けるような記述の順序を選んでいると考える。また、上に長々と引いたアテネ民会でのクレオンの姿を語った引用からクレオン自身の発言部分だけを取り出すと、「ピュロスからの知らせを伝えている者たちは真実を語っていない。今ただちに兵を送るべき絶好のチャンスである。ニキアスはなにをしているのか。今であれば私にだってことの決着をつけるのはたやすい。しかしその任は当然ニキアスのものであって私の役柄ではない。だがそ

れでも、どうしても私にそれを行えというなら引き受ける。次の兵種兵数が必要である。作戦に必要な期間は二十日でよい」となることを指摘し、「クレオンの発言そのものは、戦況を正確に知るものの言葉としてみれば、極めて妥当な内容を語っている」と評価した。そして「戦況を正確に知るもの」であるはずのデモステネスとクレオンとの接触はスパルタの和平提案に対してクレオンが強硬な案を推して和平を一時頓挫させた頃からすでに覗うことができると推測している⁽⁵⁰⁾。全体を通してアテネのピュロスにおける成功はデモステネスの卓越した戦略眼によるところが大きいと言わねばなるまい。アテネ民会は必ずしもこの卓越した軍事的才能が熱心に説くところを十分に理解していたわけではなかった。ことのなりゆきがデモステネスの作戦計画の実現に手を貸していることを否定はできない。ツキディデスの一見クレオン評価について大きな偏りを持つ記述も仔細に検討すれば、スパルタとの妥協を退け、ついにはスファクテリア島上陸戦を成功させ、スパルタ兵を捕虜とする戦果を挙げたのはクレオンとデモステネスの連携の勝利であったと解釈できることを久保論文は教えている⁽⁵¹⁾。

以上を踏まえた上で、アテネが民主政であることによってこの勝利に何か資するところがあったと考えるべき点が見出せるであろうか。アテネ民主政とピュロスにおける軍事的成功との因果的連関という問題に戻って今少し論を進めたい。

ピュロス占拠事件の経過についてオーバーは、ミュティレネ離反事件のときと同様に、開戦時のコリント代表の演説に見られたアテネ人気質の顕現を見ようとする⁽⁵²⁾。ミュティレネに送られた重装歩兵と同様、ピュロスのアテネ兵は軍船を漕ぐことも、「石を切る鉄鋸」なしで巧みに要塞を築くこともできた。デモステネスの指揮のもとに十分な装備もないままに寄せ集めの武装で奮戦してスパルタ軍の攻撃を撃退している⁽⁵³⁾。一方スパルタの正規兵はスファクテリア島に封じ込められ、ヘロットが食料を運んでこられるのに同じような方法で密かに逃れ出ることを試みようともせず、捕虜となってしまった。最後にはクレオンの連れてきた軽装兵と弓兵を用いたデモステネスの用兵術に敗れ去ったのである。デモステネスはこの戦法を自身のアイトリアでの敗戦という苦い経験から学んだとされている。スパルタと対比することが妥当かどうかはおいても何事にも革新的なアテネ人側の様子は鮮やかに現れている。そしてすでに述べたように、オーバーにとっては「アテネ人の性質」は民主政によって培われ

たものなのである。またオーバーはアテネとスパルタの違いを指導者の能力のみに見ようとするべきではないとわざわざ強調している。ピュロス戦ではクレオンが指揮官としてアテネ側にあり、他方スパルタ軍中には名将ブラシダスがいたのだと⁽⁵⁴⁾。

アテネ兵のことにあたっての柔軟な対応は、たしかに民主政の中から生まれてきたものなのかもしれない。そして彼らのこうした柔軟性なくしてはデモステネスの作戦も実を結ぶことはなかったかもしれないとも言えるであろう。しかしピュロス占領事件の経緯を振り返って見る時、指導者の能力だけにこの成否がかかっているわけではないことは十分認識した上で、それにしても印象深いのはデモステネスの異能ではあるまいか。民主政との関連を云々するならば着目すべきは、彼のような人物の飽くなき信念への固執を容認する民主政が示す多様性への寛容度ではないか。自由の賜物である多様性こそがコリント代表が語ったアテネ人の休むことを知らない活力の因であったと考えたい。アテネ民会は必ずしもデモステネスの作戦計画の卓越性を理解できたわけではなかった。しかしそれを圧殺しようともしてはいない。そもそもアテネ民主政には、本稿冒頭で示したとおり、無定見な大衆とその機嫌をたくみに取りながら権力にしがみつ়煽動政治家たちによる衆愚政治という批判があった。クレオンは確かにツキディデスの記述から想定されるような、あるいはアリストファネスが喜劇に描いたとおりの政治家であったのかもしれない。しかし最終的にピュロスでの戦果を達成させたのはデモステネスとクレオンの連携であった。異例にもクレオンを指揮官とした派兵の決定はアテネ民会で行われた。そもそもクレオンとデモステネスの結びつきの始まりはスパルタからの和平提案を議する民会であったのではないかと推測される⁽⁵⁵⁾。この発端となったピュロスにおける要塞建設について言えば、なるほどそれは嵐という自然現象に背中を押されてのことであったかもしれないが、その場にデモステネスが同行することを許したのはアテネ民会である。いずれの民会でもその場での決定が持つ意味が明確に言語化されて、その場に集う市民たちの十分な理解と納得を得ていたようには見えない。しかし自由が生み出す多様性のゆえにさまざまな意見が混在して互いに競合しているとき、多様な意見のそれぞれがどのようなものであるかの情報がある程度開かれてアクセスが可能な状態になっているならば、民会の場を用いてそれぞれの市民の立ち位置からのそれ自体は部分的でしかない理解を基にした投票の集積が指し示すところに向うことによって結果的に全体

としての的を射た判断に達することは十分可能なのではないか。アルキダモス戦争期のアテネの軍事的成功、とりわけピュロス遠征の成功は上に述べたようなことが可能であったという事例として扱い得るものと評価したい。

結 び

ミュティレネの離反と鎮圧、その後のピュロス占拠はアルキダモス戦争期のアテネの大きな軍事的成功であった。ミュティレネ離反にすばやい反応を見せたアテネ民会は、思い切って異例の軍事力を投入し、速やかに鎮圧した。ペロポネソス戦争開戦時にコリント代表が指摘した「アテネ人の性質」を余すところなく示した鮮やかな対応であったと言えよう。ミュティレネの離反鎮圧とピュロス占拠事件とに共通して言えるのはペリクレス死後においてアテネがまだ開戦時のペリクレスの戦略を固持しているということである。ミュティレネの離反はデロス同盟の崩壊を招くかもしれない一大事であった。アテネ民会が140艘もの軍船を投入して全力を挙げて鎮圧に努めたのはそれがアテネにとってまさに死活問題であることを市民団全体が十分に認識できたからであろう。このときアテネの重装歩兵が自ら舟を漕ぎ、また要塞構築にも携わったことも、オバーが評価する通り、民主政がもたらす柔軟性の一例を示すエピソードと受け止められる⁽⁵⁶⁾。一方ピュロス占拠事件はミュティレネの離反鎮圧とはやや異なった趣を示している。両者の大きな相違は一方が初めから目標のはっきりした作戦であったのに対し、他方は外的条件の変化に対応し、時にはそれに乗せられながらその時々によしと見做される判断を積み重ねた結果が大戦果につながったという点ではないだろうか。少なくともアテネ民会にとっては、当初から行き先の見えていた軍事行動ではなかった。

オバーは、アテネが、Knowledge Management に優れていたという点に着目し、アテネに特徴的な知の配分と利用はペリクレスが葬送演説で述べた参加型のアテネ民主政の特徴と一体のものであるという議論を展開した。アテネ人は自分の知るところを秘匿せずに広く多くの人に開き、多数の人たちによる審議を通してその知を統合し、一旦民会の決定を得れば全員が協調して速やかに実行するという習慣を参加型民主政を生きることを通して身に付けていたと言う⁽⁵⁷⁾。これまでのアテネ民主政研究とはいささか異なった新しい視点からの優れた研究であると言えよう。しかし2010年に書かれた論文のなかでは、

オーバーは、コリント代表が述べた「アテネ人の性質」、ペリクレスの「葬送演説」に語られたアテネ民主政の理想的表現とミュティレネ、ピュロスでのアテネ人の行動との関連に焦点を絞っているせいも、ミュティレネ離反鎮圧にせよ、ピュロス占拠にせよ、いざその具体的分析となると、スパルタと対照的なアテネ人の敏速さ、意欲的な行動、利を追求する執着などを強調するところに力を注ぎ、民主政の仕組みがどのように勝利に貢献したかという点については、兵士たちの柔軟な対応に言及してはいるものの、いささか不十分の恨みを残すように思われる。アテネ民会が「知の管理運用」という点に関してどのような機能を果たしていたかについて今一步踏み込んだ説明があってしかるべきではなかったか。もっともオーバーは1998年に著した書物でいわゆるミュティレネ論争を分析した際にすでに民会を真実よりも喝采を求める弁論の競合の場と想定する論を立てていた。そこには弁論のアリーナと化した民会に対する幾分否定的な評価が見て取れるように思うが⁽⁵⁸⁾、もしもここで言う「真実」が、明晰に言語化された提案を理詰めで検討した結果得られるものと想定されているならば、6,000名を主要民会の定足数とするアテネ民会に、もともとそのようなことが可能であるはずはない。社会に散乱した知 (dispersed knowledge) をうまく統合してよりよい判断を得ようとするとしても、判断の内容を隅から隅まで言語の形で明晰につまびらかにせずとも可能な方法があるのではないか。投票行動とその結果の集計という手段にその可能性を見ることができるよう思う。自由を標榜するアテネ民主政がもたらす多様性とそれぞれの構成員の比較的高い自律性を土台として、時にはなかなか言語化され得ない現場感覚のようなものも含めて、社会に散乱した知を投票結果の集計という作業によってうまく統合していこうとするやり方はなかなか有望な試みであったと評価しておく⁽⁵⁹⁾。少なくともこのやり方はクレイステネスの改革を出発点としてアテネに自生的に芽生えてきた意思決定の仕組みにのっとったシステムであった。ピュロス遠征の経緯を見ても多様性の存在はこのシステムの重要な鍵であると考えられる。

しかし同時にまた、ピュロス占拠という作戦の場合にもミュティレネ離反鎮圧時と同様に開戦時にペリクレスが示した大きな方向性に沿った形での作戦であったから、多くの人が合意できる目標が少し先に見えていたことも、深刻な分裂に至らないためには重要なことであったと思われる。無論、多様性と統合とを適切なところで均衡させるということが常にうまくいくとは限らない。そ

れが容易でないことはたやすく理解できよう。

ひとまずここでは、ミュティレネ離反鎮圧とピュロス遠征の成功という、アルキダモス戦争期に、ペリクレスの死に引き続いて起こった出来事について、それらを参加型のアテネ民主政がうまく機能して、集合知が発揮された事例と位置づけておく。これらの事例に関する限りという限定をつけた上で言えば、個々の市民を見れば十分な知を備えているとはいいがたい人々の判断を寄せ集めてことを決するような民会決定のやり方でなせうまく事を運ぶことができたのかという問いかけに対してはむしろ逆に、そのようなやり方だったからこそうまくいったのだと答えねばならないということになるか。この暫定的な結論はアテネ民主政が惨憺たる結果に終わる決定を下したと評価し得るシチリア遠征の事例の検討と対になってはじめて集合知か衆愚かをめぐるペロポネソス戦争期のアテネ民主政に対する総体的な評価を形成することになるはずであるが、シチリア遠征の検討についてはまた稿を改めて再考することとしたい。

《注》

- (1) 中村純, p. 3-7 参照。
- (2) Thuc. II. 65. 訳文はすべて、トゥーキューディデース, 久保正彰訳『戦史』岩波文庫, 1966 による。『戦史』上, 253 ページ。
- (3) 注(42)参照。
- (4) 中村純, 24 ページ, 注(49)参照。
- (5) cf. P. B. Manville, 1996. P. B. Manvill, J. Ober, 2003. J. Ober, 2008.
- (6) cf. P. B. Manville, 1996, p. 381-2.
- (7) P. B. Manvill, J. Ober, 2003. J. Ober, 2008.
- (8) J. Ober, 1994, p. 103.
- (9) cf. P. B. Manville, 1996. 中村純, 22 ページ, 注(4)参照。
- (10) J. Ober, 2010, esp., p. 70-72.
- (11) 加来彰俊, 第 6 節参照。
- (12) 加来彰俊, 特に第 2 節以降参照。
- (13) Thuc. I. 22. 『戦史』上, 74 ページ。
- (14) 加来彰俊, 373 ページ参照。
- (15) 加来彰俊, 370, 386-388 ページ参照。
- (16) 中村純, 16-19 ページ。
- (17) 中村純, 16 ページ。澤田典子, 138-152 ページ参照。
- (18) cf. Connor, W. R., 1971. Andrewes, A., 1962.
- (19) Thuc. III. 2-50. 『戦史』中, 23-69 ページ。
- (20) Thuc. III. 15. 『戦史』中, 35 ページ。

- (21) Thuc. III. 17.『戦史』中, 36 ページ。
- (22) Thuc. III. 50, 68-69 ページ。
- (23) J. Ober, 2010, pp. 65-87.
- (24) Thuc. I. 70.『戦史』上, 119-120 ページ。
- (25) オバーはこのような描写を過度の図式化とコメントしている。J. Ober, 2010, p. 67.
- (26) J. Ober, 2010, p. 75-78.
- (27) Thuc. II. 39, 40.『戦史』上, 227-8 ページ。
- (28) J. Ober, 2010, p. 69.「散在する知」としたのは dispersed knowledge を訳したものである。この概念について Ober は Hayek, F. A., “The Use of Knowledge in Society”, *American Economic Review* 35 (1945), p. 519-30 を参照するよう指示している。F. A. ハイエク, 田中真晴, 田中秀夫編訳『市場・知識・自由』ミネルヴァ書房, 1986, 第2章 社会における知識の利用 (p. 52-76.) によれば, この知は, 「時と場所のそれぞれ特殊な状況についての知識」であり, 「それぞれの人が有益に使用されうる独特な情報を所有している」とされている。「今日では, 科学的知識があらゆる知識の全体ではないなどと言い出すのは, ほとんど異端である。しかし, すこし反省すればわかるように, ひじょうに重要であるが, 一般的法則の知識という意味では到底科学的とは言えない, 組織されない膨大な知識, すなわち時と場所のそれぞれ特殊な状況についての知識が存在することは, 疑いの余地なく明らかである。実際においてすべての個人がそれぞれ, 自分以外のあらゆる人に対して, なんらかの優位をもつのは, まさにこの点に関してである。なぜなら, それぞれの人が有益に使用されうる独特な情報を所有しているからである。しかし, その情報が有益に使われうるのは, その情報に基づく意志決定がその人にゆだねられているか, かれの積極的な協力によって利用される場合だけである」(前掲書, 57 ページ)。
- (29) Ober, 1998, p. 96. 中村純, 18-19 ページ参照。
- (30) Ober, 1998, p. 97-98, p. 103-104.
- (31) Thuc. II. 65.『戦史』上, 253 ページ。
- (32) Thuc. III. 38.『戦史』中, 55 ページ。
- (33) Thuc. III. 37.『戦史』中, 53 ページ。Connor, 1971, pp. 167-8. 中村純, 18 ページ参照。
- (34) 人気投票という表現は必ずしも無責任な投票ということの意味しない。念頭においたのは未来予測市場のような仕組みである。J. スロウィッキー, 小高尚子訳, 『みんなの意見は案外正しい』, 角川書店, 2006 参照。
- (35) Thuc. IV. 2-23, 26-41.『戦史』中, 136-156, 159-173 ページ。
- (36) Thuc. IV. 38.『戦史』中, 171 ページ。Thuc. V. 18.『戦史』中, 284 ページ。
- (37) Thuc. I. 142.『戦史』上, 187 ページ。久保正彰, 395, 484-5 ページ。
- (38) Thuc. IV. 2.『戦史』中, 136 ページ。
- (39) Thuc. IV. 3-4.『戦史』中, 138-9 ページ。ピュロスについてのデモステネスの知見はナウパクトスのメッセニア人から得たものであるらしい。久保正彰, 382 ページ。

- (40) Thuc. IV. 5.『戦史』中, 139 ページ。
- (41) Thuc. IV. 15.『戦史』中, 148 ページ。
- (42) ツキディデスによれば提案の内容は、「すなわち、島の兵士らを武装解除してまずアテーナイまで護送すること、兵士らがアテーナイに到着した後、ラケダイモーンはニーサイア、ペーガイ、トロイゼン、アカイアの諸邦をアテーナイ側に譲渡すること（これらの諸邦はアテーナイが戦時中に奪ったものではないが、以前アテーナイが敗れた折、和議を急がねばならなかった必要上、和約の条件としてアテーナイが手放した諸領であった）、しかるのち、兵士の身柄を送還し、両国が適当と認めた有効期間を定めて、平和条約を結ぶ、というのであった」（Tuc. IV. 21.『戦史』中, 154 ページ）。久保正彰, 446-8 ページによれば、この提案はクレオンが「戦争を一つの決定的な形で終結せしめることを明確に意図していたから」ではないかという推測が成り立つ。これはもともとペリクレスの構想に含まれていたものであり、デモステネスもクレオンも同じ構想の下に動いていた可能性を示唆している。
- (43) Thuc. IV. 27-28.『戦史』中, 161-163 ページ。
- (44) ツキディデスの記述は以下の通りである。「先年アイトーリア遠征軍が蒙った敗北も、森林地帯に禍いされた点が多々あることを思えば、デーモステネスはピュロス作戦についてもこのような危惧をぬぐいさることができなかった。ところが、食事をとる場所にすら窮したアテーナイ側の兵士らが、この島の突端に船を着け、見張りを立てて朝食を作っていると、その一人が誤って森の茂みに失火してしまった。するとその時風が吹きはじめ、知らぬ間に小さい火種が燃えひろがって島の大部分が焼けてしまったのである。こうして樹木が無くなってみると、先に敵側に糧食搬入をゆるした折に算定した数よりもかなり多くのラケダイモーン兵士が島にいることをデーモステネスは確認した。かれはこれくらい大勢の敵がいるならばアテーナイ側としても真剣な戦を挑むべき価値があると見て、島も今までよりも上陸しやすい状態となったので、近隣の同盟諸国から軍勢派遣を要請しその他の用意を整えるなど、積極的な攻撃決行の準備をすすめていたのである」（Thuc. IV. 30.『戦史』中, 164-5 ページ）。
- (45) 久保正彰, 378 ページ。ツキディデスの記述の解釈については全面的に久保の教えるツキディデス「ピュロス戦記」の読みに負うていることを断っておく。
- (46) 久保正彰, 401 ページ。
- (47) 久保正彰, 417 ページ。
- (48) 注(5)参照。
- (49) 久保正彰, 455, 464 ページ。
- (50) 久保正彰, 462, 446-448, 468-469 ページ。
- (51) クレオンはまさにデモステネスが必要とした兵種兵数をそろえてピュロスへ向かったことも両者の連携振りをよく物語っている。中村純, 16 ページ。
- (52) Ober, 2010, p. 82-84.
- (53) Thuc. IV. 9-12.『戦史』中, 142-146 ページ。
- (54) Ober, 2010, p. 83, 84.
- (55) 久保正彰, 448 ページ。注(16)参照。たとえ個人の人脉がなくともクレオンが

デモステネスのアイディアを知る機会がそこにあった。

- (56) Ober, 2010, p. 81.
 (57) Ober, 2010, p. 77, 85.
 (58) Ober, 1998, p. 94-104.
 (59) 注(34)参照。

文献リスト

- P. B. Manville, “Ancient Greek Democracy and the Modern Knowledge-based Organization: Reflections on the Ideology of Two Revolutions”, in *DEMOCRATIA*, ed., J. Ober, Ch. Hedrick, Princeton U. P., 1996.
- P. B. Manvill, J. Ober, *Acompany of Citizens*, Harvard Business School Press, 2003.
- J. Ober, *Democracy and Knowledge*, Princeton U. P., 2008.
- J. Ober, “Thucydides on Athens’ democratic advantage in the Archidamian War”, in *War, Democracy and Culture in Classical Athens*, ed. D. M. Pritchard Cambridge U. P., 2010.
- J. Ober, “Civic Ideology and Counterhegemonic Discourse: Thucydides on the Sicilian Debate”, In *Athenian Identity and Civic Ideology*, ed. A. L. Boegehold and A. C. Scafuro, The Johns Hopkins U. P., 1994.
- J. Ober, *Political Dissent In Democratic Athens*, Chapter 2, Princeton U. P., 1998. p. 52-121.
- Connor, W. R., *The New Politicians of Fifth-Century Athens*, Princeton U. P., 1971.
- A. G. Woodhead, Thucydides’ Portrait of Cleon, *Mnemosyne* 13 (1960), p. 289-317.
- A. Andrewes, The Mytilene Debate: Thucydides 3, *Phoenix* 16 (1962), 36-49,
 久保正彰『ギリシア・ラテン文学研究』岩波書店, 1992.
- 田中美知太郎『ツキディデスの場合』筑摩書房, 1970.
- F. A. Hayek, “The Use of Knowledge in Society”, *American Economic Review* 35 (1945), p. 519-30.
- F. A. ハイエク, 田中真晴, 田中秀夫編訳『市場・知識・自由』第2章 社会における知識の利用, ミネルヴァ書房, 1986 (p. 52-76).
- 加来彰俊「歴史記述の客観性」田中美知太郎編『歴史理論と歴史哲学』人文書院, 1963, 365-399 ページ。
- J. スロウィッキー, 小高尚子訳『みんなの意見は案外正しい』角川書店, 2006.
- 澤田典子『アテネ民主政』講談社, 2010.
- 中村 純「デーモス, デマゴグそしてデモクラシー」『西洋史研究』34 (2005), p. 1-24.
- トゥーキューディデス, 久保正彰訳『戦史』上, 中, 下, 岩波文庫, 1966, 1967.

(古代ギリシア史／文学部教授)